

令和7年度 江戸川区立上一色中学校 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	― 自ら学ぶ生徒 ― 心身を鍛える生徒 ― 社会をつくる生徒		目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	・保護者、地域と連携し、信頼され豊かな教育活動を展開する学校 ・自律し、国家・社会の一員としての自覚と貢献する気持ちをもった生徒 ・熱意をもって職務に専念し、確実な学力に向け豊かな教育活動を展開する教師
前年度までの本校の現状	成果	①学力向上に向け、計画的な校内研修を実践し、ICT機器の効果的な活用や授業観察・研究を行い、対話的な授業への取組が増加した。 ②「心の教育」に重点を置いた道徳教育・授業を意識し、議論・対話する特別な教科道徳の授業、いじめ防止や人権教育に基づいた指導が定着してきた。 ③学校行事・部活動では「文武(部)両道」のもと、生徒の主体性を尊重し、自己肯定感・効力感・有用感を育む教育活動を実践した。	課題	①学力調査の分析結果等からC・D層の理解度の生徒の割合が多い。基礎・基本の定着、学力向上に向けて、校内研修やOJTの取組を工夫し、その充実を目指す。 ②特別支援教育やいじめ防止・不登校対応について、人権教育や生徒対応、道徳授業の指導力向上を目標にし、その取組の充実を目指す。 ③読書科の「よむYOMUワークシート」や英語教育のALTの活用、ICTや学校図書館の活用により、思考力・判断力・表現力の向上や探究学習の充実を目指す。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価(A～D)		「中間」学校関係者評価(A～D)		「年度末」自己（学校）評価（A～D）		「年度末」学校関係者評価（A～D）		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力向上	○授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な定着と学力向上の方策	・校内研修における授業観察、研究授業、協議会での主体的・対話的で深い学びを実践していく。 ・全国、区の学力調査、定期考査の正答率より、それぞれの教科、分野の理解度を分析し、授業、家庭学習課題の改善につなげる。	・生徒が、授業アンケートで授業がわかる、達成感の感じられるという肯定的な回答を85%以上得る。 ・区の学力調査では、経年変化で、前年度より正答率が上回るようにする。	80%		B	・生徒の全教科授業アンケートで、肯定的な回答が85%以上であった。また、研修主任、情報リーダーを中心に校内研修を計画的に実施し、授業での効果的な活用方法の技能を高めた。 ・全国学力・学習状況調査の結果から学力やその傾向、学習状況を分析し、基礎の学力、家庭学習習慣の定着に向けて定期考査前でPDCAサイクルの家庭学習方法を身につけていく。	B	・全国学習状況調査より、家庭学習時間が少ない。家庭と協力して全校体制で、基礎の確実な定着や、学力の向上に向けて取り組む必要がある。 ・学校(授業)等の様子から生徒は意欲的、活発に学習に取り組んでいる様子が見られた。 ・ICT機器の活用が学習に活かされるとよいが、家庭での端末の活用方法についてはルール等、改善が必要である。					
	○学習習慣の定着に對しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	・質問・補習教室を定期考査前に実施し、また年間をととして、放課後補習授業を計画的に実施し、数学・英語の基礎力の向上を図る。 ・授業改善と授業力の向上を教科部会や校内研修で計画的に取り組み、教職員間のOJTを職層に應じて実践する。	・質問・補習教室を年間4回実施し、1回ごとに課題を改善、効果的な実施を検証する。 ・学期に1回、教科部会・校内研修で授業改善・授業力向上の研修を実施する。	90%		A	・昨年の質問教室から、生徒が自主的に参加できる補習教室を開催し、達成感をもたせて学習意欲を向上させている。 ・研究授業やICTを活用した、学力向上につながる効果的な活用方法等の研修を深め、主体的、対話的な活動から学力向上につながる授業の実践につなげた。	A	・定期考査前の補習教室に前向きに取り組んでいるようで、業者の補習も効果的に活用できるとよい。 ・授業評価も肯定的な意見が多く、教員が一体となって、頑張ってもらうことで、学習活動に意欲的に取り組める学校となっている。					
	○読書科の更なる充実・探究的な学習の充実	・「よむYOMUワークシート」を朝読書、授業等で計画的に実施し、読書科の成果物作成と併せて、読書科の取組を充実させる。また探究的な学習の良さを理解させ、問題解決力の向上や発表する力の育成を実現する。	・全学年「よむYOMUワークシート」を年間30回実施する。また3年生は卒業研究を完成させ、1・2年生は調べ学習や成果物の発表を2回以上実施する。	90%		A	・よむYOMUDAYを毎週実施し、よむよむワークシートを使って読解力を向上させている。朝や総合学習の時間で、読書の習慣化を図り、国語の授業で応用・発展的な活動を実践している。今後は弁論大会・読書科コンクールや国語科の取組と連携させて実施を予定。3年生は修学旅行の事後学習から卒業研究につなげていく。	A	・今年度は朝の時間に決まった課題に取り組んでいるため、読書や本に興味をもつ生徒が増えている。しかし読解力が高まっているかは、何か結果として表れるとよい。 ・新聞や本を読むことが、家庭での生活で少なくなっているのので、総合や学校行事、国語の授業等で読書活動を増やして、文章力や読解力を養ってほしい。					
体力向上	○運動意欲の向上や健康の推進に向けた取組の実施・改善・充実	・体育授業導入での上中トレーニングを実施する。 ・1学期の体力テストから課題点を分析し、体育授業・部活動等で体力向上を図る。	・体育授業前の上中トレーニングを毎時間実施する。 ・毎学期、体育授業と部活動の体力向上の視点から、体力向上委員会を中心として検討する。	85%		B	・体育の授業前に上中トレーニングを計画的に実施し、体力と意欲の向上に取り組んでいる。2、3学期も内容を発展させていく。 ・保健体育の授業では補助運動を計画的に実施し、単元ごとのレクリエーション的な活動をとおして、主体性や深く考えることを意識させている。今後も継続していく。	B	・部活動に大変、意欲的に取り組んでおり、生徒が活動しやすい環境を構築できている。 ・学校公開でも体育の授業に楽しく参加している様子がある。しかし、プールが屋外にあったり、校庭も涼しい場所がなく、熱中症対策については徹底が必要である。また古い設備や体育館の用具が壊れたままで大変危険であり、施設の修繕を早急に実施するべきである。					
	○部活動・学校行事における「文武(部)両道」の実現	・1学期の運動会や、部活動の取り組みにより、運動が楽しいと感じる場面を増やし、自己肯定感を高め、自信をもって主体的に行動する態度を育成する。	・各行事において自己肯定感を高める活動を実施し、部活動においては学期ごとや代わりりとなる場面で集団の中で適材適所で特性を活かせる集団を構築する。	95%		A	・運動会の学校行事等では学級・学年で目標をもたせて生徒自らが創意工夫し、その実現に向けて主体的に活動している。また、部活動では向上心や持続性を大切に、体力づくりを積極的に行い、個々の運動能力に応じて指導内容を工夫・改善している。	A	・家庭でも体力が向上している様子があり、充実した様子で学校行事や部活動に子どもたちは取り組んでいる。 ・運動会では様々な競技において生徒が生き生きとした様子で取り組んでいた。上中ソーランは3年生が立派に踊っていた。					

共生社会の実現に向けた教育の推進	○ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実	・教室の整理整頓、配布プリントや投影画像の文字のUD化など授業や特別活動において個別の支援を実践する。また一人一台端末の効果的な活用を図る。	・ふれあい週間等でUDや人権に配慮した掲示・表記の徹底を実践する。 ・環境委員会による各学期2回の教室の整理整頓、掲示物チェックの実施。	90%		A	・校内委員会や研修等で。人権教育やUDを取り入れた学級経営、特別支援教育、人権教育やその指導について研究を進めた。 ・「心の教育」を常に意識し、子どもたちに寄り添い、不適切な指導の根絶への理解を深め、指導力の向上を実現した。	A	・面談の機会を設けていただき、巡回指導教員や特別支援教室専門員と相談することができた。 ・週1回の特別支援教室の指導で、エンカウンターやよりよいコミュニケーション方法について学び、他者との関わりや、集団生活での大事なことの理解ができています。					
	○校内委員会の活性化や組織体制の構築を図ることなどによる指導・支援の充実	・特別支援教育や週1回の教室の状況について、特別支援教育コーディネーターや専門員を中心に、校内委員会を開催する。また巡回指導教員及び巡回指導心理士からの助言を活かし、個別最適な対応を実現する。	・校内委員会を2週に1回以上開催し、また週1回の生活指導部会と連携し、巡回指導教員と情報共有を図る。	90%		A	・週1回のコーディネーター専門員、巡回教員との情報交換を行い、特別支援教室の生徒の現状や課題を共有し、集団生活での特別な支援や個々への合理的配慮等、個別の指導を充実させた。二者面談で個々の生徒の特性に応じたそれぞれの対応を考えていく。	A	・生徒一人ひとりの特性に応じて支援や配慮の方法を考えるためには、打合せや会議が必要になり、どのように運営していくか、方策や方法が大切だと感じる。 ・心理士やカウンセラー、ソーシャルワーカーなど、専門性のある人材が確保されているので上手に分担できるとよい。					
	○エンカレッジルームの活用促進 ○副籍交流、交流及び共同学習の実施・充実	・学校生活、学習機会の確保のため居心地の良いエンカレッジルームの活用を巡回指導教員と連携して支援できる体制を構築する。 ・副籍では間接交流により、共生社会の理解を深める。	・巡回指導教員との月1回の使用状況の確認、週1回の巡回指導の実態の把握。 ・副籍交流では、鹿本学園との関わりにより、年間3回以上の交流を実施する。	80%		B	・不登校巡回教員と連携し、エンカレッジルーム、活用方法を確認。エンカレッジサポーター（別室指導支援員）と、不登校生徒一人ひとりへの対応を協議している。 ・1学年の共生社会の実現に向けた学びの活動で鹿本学園との交流活動を計画している。	B	・不登校生徒や教室に入れない生徒に対して、過ごしやすい環境を構築していて、エンカレッジルームやSC教室を効果的に活用している。 ・江戸川区のみらいサポート教室とエンカレッジルームを併用して活用することで、学習や生活する場や機会が提供されている。					
不登校・いじめ対応の充実	○いじめ・不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくりの取組の充実	・生徒の主体性を活かした学校行事や学級組織作りを実施し、生徒会活動を中心に学校生活全体でいじめの未然防止、個に応じた対応を行う。 ・いじめ防止基本法に基づき職員全体で共通理解を図り、いじめ対策、生徒対応等の校内研修を実施する。	・いじめ調査を各学期、年間3回以上実施していじめ防止対策や早期発見・未然防止に取り組む。 ・年間3回いじめ防止研修を校内研修で企画・実施し、ふれあい月間においては個人研修で、理解を深める。	95%		A	・生活指導部会や運営委員会を週1回行い、生徒の変容と行事、学級経営・集団活動の工夫・改善を実践している。 ・6月にふれあい月間でいじめ防止や対応について、個人研修と、いじめ重大事態とその対応について校内研修を実施。いじめの未然防止や早期・対応を実践している。	A	・小さな問題はあるが、早期対応・解決し、生徒が主体となって活動し、いじめのない、よりよい人間関係や学校生活が送れていると聞き、安心した。 ・1学期終わりに全学年、教員との三者面談、1年生は学年教員やSCと全員面談する機会があり、子どもの発達段階に応じた相談できる環境が構築できている。					
	○不登校対策の実施・充実させ、教育相談の強化	・SC・SSW・不登校コーディネーターを中心とした不登校対策推進委員会を充実させ、情報共有や共通理解を図り、全校体制で組織的な体制を構築する。 ・不登校担当巡回教員を活用し、生徒の状況を把握し、今後の手立てや対応策を検討するための研修を行う。	・不登校対策推進委員会を1か月に1回以上、個々の生徒については週1回実施し、生徒の変容を把握する。 ・不登校巡回教員を活用した研修を年間1回実施し、組織的な対応を実践する。	85%		B	・不登校対策推進委員会を月に1回実施。夏休み前や2学期始まってから、過ごしやすい生活環境が構築できるよう、不登校巡回教員やSSW・SCとの連携を図り、家庭と学校との連絡・相談を円滑に行った。 ・1学期生徒の生活アンケートを実施し、集団や生徒個々の、状況やその傾向を分析し、学級経営や対応策につなげた。	B	・スクールソーシャルワーカーやカウンセラーと定期的に面談や家庭訪問が行われていて学校とのつながりがもてている。 ・地域の人材や外部の教育相談機関と連携し、より一層、効果的な支援方法を考察し、不登校生徒を減らしていけるとよい。					
	OL-GATE「毎日の記録」、Hyper-QUの活用	・L-GATE「毎日の記録」により、学級や生徒の状況を察知し、また生徒の生活・学習習慣の向上を促進する。 ・1学期にHyper-QUを全学年で実施し、教職員が学年、生徒一人ひとりの特性を分析、把握できるようにし、学校行事、特別活動に活かしていく。	・毎日、L-GATEで授業日、長期休業中の生活、学習の様子を記録・確認する。 ・QUを年1回実施し、SCによる分析結果による研修もを行い、学級や学年の状況の把握、教員の生徒指導力の向上を目指す。	80%		B	・学期中や夏休みの長期休業中にL-GATE「毎日の記録」で生生活状況を把握し、つながりのある温かい人間関係の構築を実現している。 ・1学期Hyper-QUを実施し、学級や学年の結果を分析し、夏季休業明けにSCの専門性を活かした研修を実施し、学級経営・生徒対応力を向上させ、普段の生活や行事等での運営につなげた。	B	・「毎日の記録」により基本的な生活習慣の定着や教員とコミュニケーションがとりやすくなった。しかし、簡易的になり、学習や生活の向上につながるかは疑問である。 ・Hyper-QUを実施したり研修を行うことで、いじめのない安心・安全な学校生活が送れ、仲間とのより良い関係が送れるようになるとうい。					

学校（園）の実現	地域社会に開かれた学校	○学校ホームページ・連絡アプリ等の配信の充実	・地域、家庭に授業日に、学校HPで教育活動・各学校行事・学校生活の生徒の様子、給食献立等情報を発信する。 ・連絡アプリ等で家庭に緊急連絡を行い、早期に学校、教育委員会等の情報を周知する。	・HPの更新は、給食の献立等を含め、学年や分掌のHP担当者が週1回以上行う。 ・連絡アプリは重要な配布物、学校行事の実施時等に随時配信する。	85%		B	・学校HPで各教育活動について、更新を継続。給食活動では、献立等を配信し、学校生活の様子について、情報を公開している。 ・学校だより等の配布物や重要なお知らせは生徒へ紙での配布、保護者へは、緊急連絡についてtetoruと併用して配信している。	B	・宿泊行事や運動会の活動についても学校HPで様子を確認できた。今後も色々な活動で、さらに紹介しているものを見られるとよい。 ・PTA活動やボランティア、教育委員会からの緊急連絡や重要なお知らせをtetoruで把握できた。					
		○学校公開、保護者会、説明会等の実施・充実	・学校行事、その説明会等、公開する教育活動について、地域・保護者が参加する機会を作る。 ・授業公開や学校行事の公開を行い、それぞれの行事・教育活動について積極的に学校の状況を伝える。	・毎学期の保護者会や行事・進路等の説明会を実施し、交流・情報発信する機会を増やす。 ・年間4回の学校公開による授業・行事の公開を実施する。	90%		A	・学校行事やPTA活動をとおして学校公開の運営、保護者会や三者面談、進路説明会等で学校や子どもたちのことについて、地域・保護者と一緒に活動、考える機会をつくっている。 ・「地域に開かれた学校」を実践し、学校(授業)公開、小学校への積極的な公開、運動会等の学校行事で、教育活動や生徒の様子について地域・保護者に学校の情報を伝えられた。	A	・昨年度と比べて、学校公開や保護者の参観が増えて、運動会をはじめとした学校行事や学校公開に積極的に参加している。 ・保護者会や進路・宿泊行事の説明会、三者面談等で子どもたちの普段の様子や、教育活動の内容について、把握することができた。					
		○教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施	・学校評議員会、PTA運営委員会等で、教職員と地域・家庭が教育活動について意見・課題を共有、連携の機会を作る。 ・三者面談で学校生活、学習状況、家庭の課題を共有し、一体となって生徒を見守る環境を作る。	・地域・保護者への学校評価アンケートを年1回実施する。 ・三者面談を学期末で2回、3年生は進路面談も合わせて3回実施し、保護者学校評価を1回実施する。	85%		B	・前期生徒の授業評価を実施し、教員が授業の方針や方法について、生徒の実態を考えながら、授業改善・研修を行った。学校行事に関しては、学校評価を実施し、内容の改善・精選を行い、後期、来年度につなげていく。 ・前期、学校評議員会やPTA運営委員会を2回ずつ開催し、教育活動の現状の課題や今後の改善点について検討。地域に根差した学校づくりが進められている。	B	・PTA総会や運営委員会等で教育活動や学校の様子について聞くことができた。地域が一体となって学校の行事に協力できるよう、保護者の参加を増やしていきたい。 ・家庭学習習慣の定着が大事であると聞き、業者の放課後補習教室への参加が少ないようでもっと増えていくとよい。 ・学校評議員や学校応援団の意見や要望が発信しやすいような学校評価があるとよい。					
教育の展開	特色ある	○「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	・校務分掌の見直しを図り、仕事内容の精選や役割分担をバランスよく実施し、負担を軽減する。 ・各教員が部活動のない日など定時退勤を意識し、働き方の改善を行う。	・各学期分掌部会、毎月、運営委員会等で校務分掌の見直し、仕事の精選を行い、業務の効率化や前年度より、勤務時間の減少を実現する。	80%		B	・学校経営支援を担う人材を引き続き活用して、それぞれのスタッフや外部指導員、支援員等と連携して、業務の効率性、種類を精選し、学習指導や生徒対応に時間が費やせるようになった。また、校内や職員室内のICT環境を整備し、仕事が効率よく進むようにして、勤務時間短縮を実現していく。	B	・PTA活動等で、教育活動や学校行事の運営に携わることができ、子どもたちの様子も見ることができた。今後も協力できる場があれば、携わっていきたい。 ・働き方の変革については、先生方の業務だけでなく、学校・家庭・地域との連携やPTA活動の効率化、学校行事の在り方等を考える必要がある。					
		○「小中連携教育構想」及び「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	・「小中連携教育構想」に基づき、小学校の児童、保護者に向けて学校公開、授業体験、部活動見学・体験の取組を実施、入学時に安心して生活できるよう、情報を発信する。	・児童の授業体験、部活動交流、保護者説明会を年2回実施。また、儀式行事や研修等で教員が小学校に訪問する機会を年間3回以上設ける。	90%		A	・小学校との小中連携校を拡大し、授業公開や体験授業、部活動体験を9月に実施。保護者会でも、「地域に開かれた教育活動」を説明し、情報を発信した。後期は入学説明会や体験入学、小学校訪問等を予定している。	A	・小学校に土曜日の授業公開や体験活動、説明会等、学校の様子を積極的に発信している。 ・来年度、入学生を増やす取組として先生方が動いているので、地域でも祭礼、奉仕活動などで学校の生徒が参加したり学校の様子がわかる活動を行っていけるとよい。					
		○自分の考えをもち議論する道徳授業、いじめ防止基本法に基づく授業を実施	・道徳授業の研究授業を各学年実施し、道徳授業ローテーションやいじめ、人権教育、愛校心の育成など、生徒が安心して、学校生活を送り、「上中であかった」と思える教育活動を実践する。	・「いじめ防止」に関する授業を各学期1回ずつ実施。また前期の生徒総会、後期の生徒会選挙など生徒が自発的によりよい学校生活を目指す機会を作る。	85%		B	・道徳授業地区公開講座を1学期実施し、道徳観や人権感覚について保護者、生徒と共に考えることができた。2学期は教員による道徳授業ローテーションを実施し、様々な視点で問題解決していく力を育成する。また生徒会活動を活性化させ、専門委員会等で生徒が自主的に提案するなど、主体的に活動する場面を増やしていく。	B	・道徳授業を観察し、社会に出ていくうえで、自己判断する力を養い、困難なことを解決できるよう、今後も継続して指導してほしい。 ・給食活動で班で食べる機会をもつなど、コロナ禍を経て、いろいろな場面で進化した取組を生徒に考えさせるとよい。					